

教えて♪ もくじい。シリーズ⑩

世界文化遺産 “富士山”

Mt. FUJI



富士山世界文化遺産
登録10周年記念

The 10th anniversary of the Inscription
of the world heritage Falloan

古来、富士山は美しい姿と火を噴く荒ぶる姿をあわせ持つことから、神や仏の棲む聖なる山として、人々の信仰の対象となり、^{しうか}詩歌や絵画など様々な芸術活動の源泉となってきました。

2013年6月、富士山はその文化的価値が認められ、^{せかいぶんかいういさん}世界文化遺産(※)に登録されました。

今回は世界文化遺産富士山の価値を紹介するとともに、身延町と富士山の関わりを紹介します。



世界文化遺産富士山の構成資産の一つ本栖湖

※世界文化遺産とは・・・

1972年のユネスコ総会で採択された世界遺産条約に基づき、世界遺産リストに登録された建造物や遺跡、文化的景観のことです。現代の人々が先人から受け継ぎ、次世代へ伝えていかなければならない人類共通の宝物で、国際的な保護と保全が求められます。日本では令和5年現在、法隆寺や姫路城、^{しらかわごう}白川郷、原爆ドーム、^{いわみぎんざん}石見銀山など20件が登録されています。



左の絵は江戸時代を代表する浮世絵師の一人、^{かつしかほくさい}葛飾北斎(1760-1849)が描いた『^{ふかく}富嶽三十六景 ^{みのぶがわうらふじ}身延川裏不二』です。北斎が70歳を過ぎてからの作品で、全46枚で構成されており、その大半は富士山を背景に当時の人々が生き生きと描き出されています。

波が折り重なるように描かれ、水量の多さと流れの速さを見事に表現している。身延川から富士山は見えないのじゃが、険しい景観を眺めながら、旅人たちは身延山久遠寺へお参りに向かったことを伝えたかったんじゃのう。



富士山には、どんな構成資産があるの？

富士山の信仰や芸術にゆかりのある神社や湖など、合わせて25か所が構成資産として登録されています。



出典：富士山世界文化遺産協議会 『みんなで守ろう 世界遺産富士山』

②

構成資産とは、富士山が「信仰の対象」「芸術の源泉」となった価値を証明できる文化資産のことじゃ。富士山の山体だけでなく周囲の神社や登山道、風穴、溶岩樹型、湖沼などがあるぞ。



● 本栖湖の自然と歴史



本栖湖の伝説 「上九一色村誌」より
昔アマジャクという大力の男が本栖へ来て、村の西の広い野原を掘り、その土をもっこに入れてかついで、駿河の海岸へ行って捨てた。夕方からせつせと掘って二もっこ捨てたら、その土で今の富士山ができた。アマジャクはもっと高くしようと、さらに一もっこかついで途中まで行くと、もう東の空が白んで(夜が明けて)来たので、そこへ土をあけて逃げ去った。途中で土をあけた所が小山になり、これを一もっこ山という(側火山の大室山)。またアマジャクが土を掘った跡へ水が溜まったのが本栖湖だという。

※国土地理院HP 赤色立体地図に加筆

本栖湖は富士五湖のうち最も西側に位置する湖で、湖面の西半分を身延町、東半分を富士河口湖町にまたがっています。面積は4.7km²、水深は121.6m、平均水位は900m程を測ります。富士山の溶岩流によりできた堰止湖で、かつては精進湖と西湖とつながった大きな湖でした。平安時代の書物『日本三代実録』によると、貞観6年(864)7月17日条に溶岩流が本栖と剱の海を埋めたとあります。剱の海とは精進湖と西湖が一つの湖であったときの名称で、この時の噴火活動により、本栖湖・精進湖・西湖がおおよそ現在の形になったとされます。

本栖湖の東側には甲斐と駿河を結ぶ要路であった中道往還が通っています。天正10年(1582)には織田信長が富士山を愛でながら都に向かった道であり、江戸時代には甲府に海産物を運ぶ最短の道で通称“魚の道”とも呼ばれました。本栖湖北東の本栖の城山には複数の郭や堀、溶岩の石積みが存在します。武田氏の時代から甲駿の国境警備のために置かれたと考えられており、九一色衆の渡辺因獄佑などが依ったと伝えられます。また、湖南西の山中の川尻金山は“川尻千軒”という言葉が残るように最盛時はかなり盛大であり、その起源は戦国期に遡るともされますが実態は不明です。昭和初期まで採鉱され、テラス状遺構や坑道跡なども残っています。

本栖湖南東の遠浅の湖底からは、広い範囲で縄文時代や古墳時代の土器が発見されておるんじゃ。古い時代に集落が営まれておったが、溶岩が流れ込んで水位が上がり、湖底に沈んだと考えられておる…。



● 芸術の源泉としての富士山 本栖湖と「湖畔の春」

千円札の裏面に描かれている富士山。この景色は昭和10年（1935）5月、本栖湖北西岸の中ノ倉峠で撮影された、写真家岡田紅陽氏（1895-1972）の作品「湖畔の春」がモデルになっています。岡田紅陽氏は新潟県の生まれで、1916年忍野村からの富士山の眺めに感動し、生涯富士山の撮影に身を捧げました。



「湖畔の春」 岡田紅陽写真美術館所蔵

世界文化遺産富士山の構成資産25件のうち芸術の源泉として価値が認められ登録されたのは、本栖湖と三保の松原（静岡市）だけです。2013年の富士山の世界遺産登録では、国際記念物遺跡会議（※）で構成資産より除外の勧告を受けていた三保の松原が含まれていたため、「逆転勝ち」とも評されました。その立役者は当時文化庁長官であった近藤誠一氏です。近藤長官は歌川広重の浮世絵、富士三十六景「駿河三保の松原」や、本栖湖からの富士山の写真が掲載された資料とともに千円札を各国要人へ見せ、富士山と三保の松原は地理的に離れていても日本文化の中では一体であり、その精神的なつながりの重要性を世界にアピールしました。

※International Council on
Monuments and Sites、
略称 ICOMOS、イコモス



中ノ倉峠に立つ晩年の岡田紅陽氏
（本栖湖畔の民宿 浩庵所蔵）



富士三十六景「駿河三保の松原」

TVアニメ・ドラマ化したマンガ『ゆるキャン△』にも登場する町営トイレ脇から30分ほど山道を登ると、中ノ倉峠の展望デッキに着けるのじゃ。「湖畔の春」撮影時から約90年が経過した今も、当時とほとんど変わらぬ富士山と本栖湖の絶景を堪能できるぞ。ちなみに2024年から新紙幣が発行され、千円札の裏面は葛飾北斎の富嶽三十六景「神奈川冲浪裏」を元にデザインされる予定じゃ。



新しい新千円札の裏面
日本銀行HPより



● 信仰の対象としての富士山

8世紀から9世紀頃、人々は富士山の度重なる噴火を火の神の怒りと考え、それを鎮めるために山麓から富士山を「遥拝」する場所に浅間神社などを建立しました。12世紀頃、噴火活動が鎮まると山岳修行の霊場として修験者が入山し、富士山の神仏から霊力を得るために山頂を目指す「登拝」が始まります。14世紀以降には庶民の信者も修験者に導かれて登拝するようになり、登山道（吉田口、大宮・村山口、須山口、須走口）の整備が進みました。17世紀には長谷川角行(1541-1646)を開祖とする富士山の信仰組織「富士講」が誕生し、角行が修行したとされる人穴や白糸ノ滝、内八海、外八海、元八海（忍野八海）などを聖地として巡る「巡拝」が始まります。18世紀以降、富士講は分裂しつつも発展し、庶民の信仰の代表の一つになりました。とくに江戸の町は「江戸八百八町に八百八講、講中八万人…」と言われたほど信者が多く、富士登山が困難な人々のために富士山に模した人工の山や塚である「富士塚」も各地に造られました。



葛飾北斎 富士三十六景「諸人登山」

山頂を目指す富士講の人たち。白雲がわき立つ中、杖をつきながら険しい山肌をはうように登っていく。右上の石室では登山者たちがうすくまって休息をとっている。

「富士講」が誕生し、角行が修行したとされる人穴や白糸ノ滝、内八海、外八海、元八海（忍野八海）などを聖地として巡る「巡拝」が始まります。18世紀以降、富士講は分裂しつつも発展し、庶民の信仰の代表の一つになりました。とくに江戸の町は「江戸八百八町に八百八講、講中八万人…」と言われたほど信者が多く、富士登山が困難な人々のために富士山に模した人工の山や塚である「富士塚」も各地に造られました。



長崎の富士塚（東京都豊島区）

高さ約8m。富士講信者が奉納した石碑や石仏など約50基が置かれています。



富士講で「草山」は俗界、「木山」は俗界から神仏の世界の中間、山頂を含む「焼山」は神仏の世界＝死後の世界と考えられていました。



富士山の山頂を八葉とも呼ぶんじゃが、富士講で噴火口には大日如来、それを取り囲む八つの峰にはそれぞれ仏様がおると考えた名残じゃ。今でも山頂を時計回りに一周することを「お鉢巡り」というが、その由来は「お八葉巡り」からきておる。また、「天地の境」とされる五合目・六合目の山復を一周する「お中道」も修行の道じゃったが、とても危険な道で富士登山3回以上の経験と誓約書などがないと通る許可が下りなかったんじゃ。

※現在「お中道」は山梨県側五合目の小御岳神社～大庭～大沢崩れや静岡県側の富士宮六合目～宝永第一火口～御殿場口六合目などのルートを除き、登山道としての利用は廃止されています。

←くしい。長谷川角行Ver. …角行は富士山麓の人穴（富士宮市）の中で、4寸5分角（約14cm角）の角材の上に爪立ちして、一千日間の苦行を行ったため、「角行」という行名を与えられました。

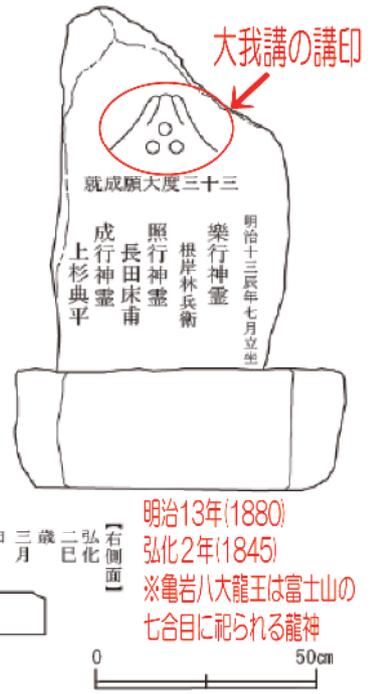
● 身延町の富士山信仰① 大我講と西嶋の浅間神社

かつて町内に存在した富士講の一つに大我講があります。大我講は江戸時代の終わり頃、市川大門村の大寄友右衛門が立ち上げた講です。友右衛門は安政3年(1856)に亡くなるまで、河内領及び駿河・上野方面へ布教活動を行い、千数百人の先達(信仰上のリーダー)になったといわれます。また、大我講は



西嶋の浅間神社の石造物群

天保14年(1843)に忍野八海を再興したことでも知られます。当時の講員名簿が忍野村の東圓寺に残っており、これによると本拠地の市川大門村に次いで西嶋村に講員が多かったことがわかっています。



西嶋に残る富士山信仰の痕跡として、集落西側の山の上、現在のゴルフ場内に浅間神社があります。文政7年(1824)に創立された神社で、祭神は木花開耶媛命を祀っています。樹木に囲まれた社殿は東を向いて建っており、昔は富士山の展望も開けていました。境内には江戸時代の終わり頃から明治時代に大我講および扶桑教の信者が建てた石造物が9基あります。石造物には大我講の講印である、三峰の富士と三ツ星紋が刻まれています。



明治13年(1880)
弘化2年(1845)
※亀岩八大龍王は富士山の七合目に祀られる龍神



西嶋の集落から浅間神社へ登る道は三筋あって、登山口は北口・金山口・表口と名づけたそうじゃ。金山口を吉田口と呼ぶこともあったようじゃが、その途中には小御嶽大神の石碑が建てられておる。小御嶽大神は富士山五合目の小御嶽神社に祀られる神様のことじゃ。西嶋の人は浅間神社を富士山の山頂に見立てて、富士山の写し霊場を作ろうとしたのかのう。西嶋といえは和紙の里。紙漉きには原料の楮や三椏と大量の水が必要じゃ。木花開耶媛命は火を鎮める水徳の神でもある。富士川の度重なる氾濫の中で、農業や紙漉を生業にした人々にとって、富士講は特別な信仰だったはずじゃ。



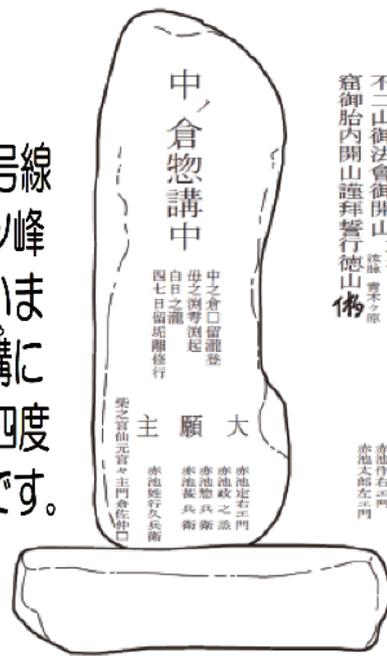
● 身延町の富士山信仰③ 中之倉の富士講碑

この石碑は中之倉の中屋敷、国道300号線より少し下った旧道沿いにあります。三ツ峰の富士山の下に“臣”の一字が刻まれています。中之倉の人々が富士講の一つ、山臣講やましんこうに所属して文政12年(1829)に「御中道十四度大行成就」などを記念して建立したものです。

山臣講は相模原の門倉政四郎が上吉田の御師おし(※)菊田式部きくたしきぶ(行名臣行徳恵)の弟子となり、臣行の教え広めた組織です。

門倉政四郎は誓行徳山という行名を与えられ、精進御穴で入定したされています。

※御師とは富士山を信仰する人々に自宅を宿泊所として提供しながら、登山の準備や食事の提供、信者に代わって祈りを捧げるなど様々なお世話をする人々を指します。



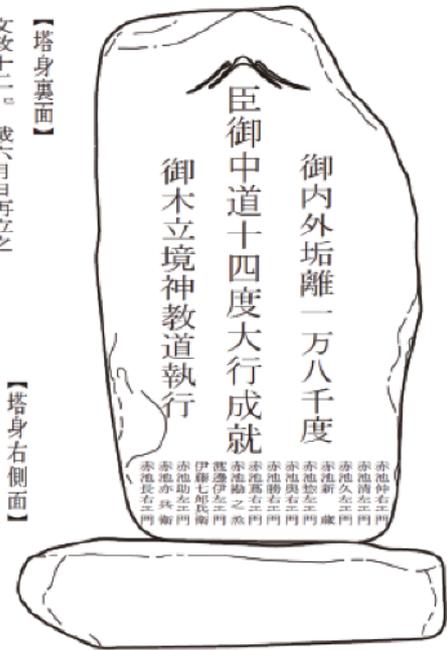
【塔身裏面】
文政十二。載六月日再立之

石大工 石原孫左衛門實重
信濃邦口羽主中川主水左源重純
不二山御法會御開山
窟御胎内開山謹拜誓行徳山佛

【塔身右側面】

其世入
赤池伊右門
伊藤山之丞

赤池右三門
赤池大崎左三門



0 50cr

● 日蓮聖人と富士山

日蓮聖人は文永6年(1269・波木井実長の招きにより身延山へ入山する5年前)、上吉田の御師塩屋平内左衛門の案内で富士山に登り、五合五勺の経ヶ岳に經典を埋めたという伝承があります。日蓮聖人は富士山の神を富士千眼(浅間)大菩薩として崇め、天照大神や八幡大菩薩と同格の法華経守護神として信仰していました。

経ヶ岳には現在も日蓮宗のお堂と聖人のお像がありますが、近くには聖人が籠った姥ヶ懐と呼ばれる洞窟もあります。富士山麓にはこの他にも聖人ゆかりの事績が数多く残されています。



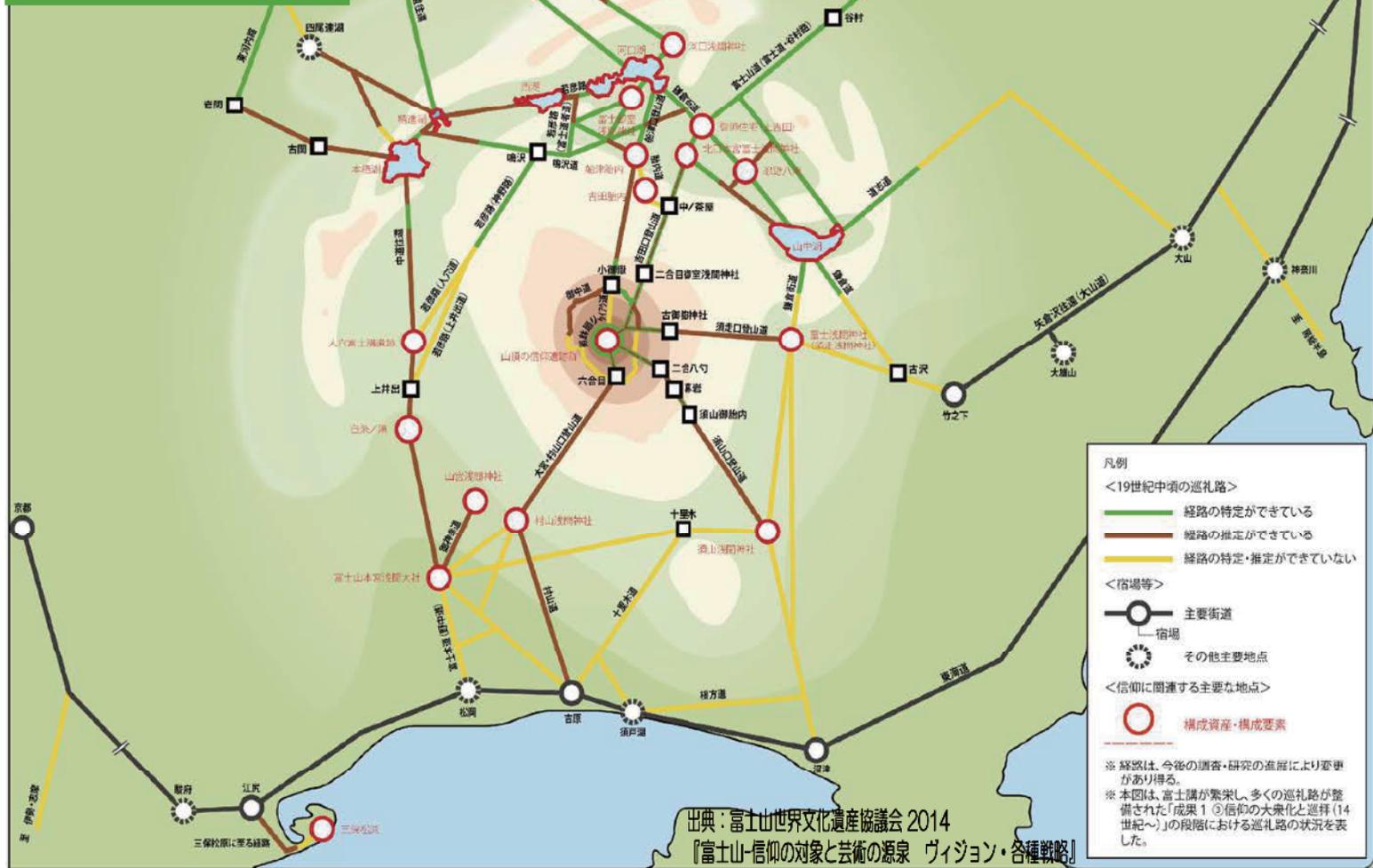
「日蓮姥ヶ懐遺文」(部分 ふじさんミュージアム所蔵)

右の絵図は江戸時代に身延山参詣の案内のために出版されたもの一部で、身延山の上ノ山地域が描かれておる。五重塔などの建物はリアルじゃが、富士山は三ツ峰の簡単なタッチで描かれておるのう。三ツ峰の富士は富士講の講印によく使われるモチーフなんじゃ。富士山信仰と身延山信仰、実は繋がりが深いのかもしんれんのう…。



「身延山図経」(部分)

● 富士山に集う 巡礼のみち



上図は富士講の最盛期であった19世紀中頃の各巡礼路の位置と経路を表しています。富士講の信者等は甲州街道や東海道・鎌倉街道・中道往還などの主要な道を使いながら、富士五湖などの湖沼を巡り、山麓の各登山道から富士山に集ったことが分かります。西嶋村の信者は富士山頂の雪が消える頃、出立の朝に地元の浅間神社へ参拝し、久那土・古関・中ノ倉峠を経て本栖湖へ至り、その日のうちに吉田の御師宅に着いて宿泊。翌朝、庭先の小川で「水行」を行って富士山に登り、その夜は五合目の小御嶽神社に参籠し、翌日の未明に出発して頂上に到達し、「お胎内巡り(※)」をして帰路についたと伝えられています。

※富士山の溶岩が流れる際に樹木を取り込んで固まり、燃えつきた樹幹の跡が空洞となったものを溶岩樹型といいます。そのうち、内部が人間の内臓をくりぬいた胎内に似たものが胎内樹型と呼ばれ、「お胎内巡り」と称して洞内を巡る信仰がありました。代表的なものに船津と吉田の胎内樹型があります。



富士講の信者は富士山山頂を「あの世」と考えられておったから、登山は死出の旅立ちであり、山頂からの下山は新たに生まれ変わることを意味していたんじゃ。信者が身を包んだ白装束は死装束でもあるんじゃのう。富士山は今はレジャーで登る人がほとんどじゃが、世界文化遺産富士山の信仰や芸術などの文化的価値を知ると、その偉大さや美しさ、尊さをより感じるができるかもしれんのう。